

World Englishes  
Contexts and Relevance for Language Education  
世界の諸英語  
言語教育の文脈と関係

●坂●●

1. 著者紹介

2. 概要

- 2.1 Introduction
- 2.2 Emergence of Varieties in Diaspora
- 2.3 Aims and Focus of Research
- 2.4 The relevance of WE as a Field of Research
- 2.5 Lingua Franca and Global Englishes
- 2.6 Future of Wes
- 2.7 WEs and the Language Classroom
- 2.8 Conclusion

【注意 閲覧者の方へ】

この資料は、東京学芸大学大学院教育学研究科国語教育専攻日本語教育コースの「日本語教育研究法B」（担当：南浦 涼介）ので取り扱ったHinkel (ed) (2011). *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*のChapter1の発表資料です。教育的価値、資料的価値としてウェブ掲載をしていますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文への引用等をご遠慮ください。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載をご遠慮ください。質問については東京学芸大学南浦研究室 (<http://www.u-gakugei.ac.jp/~minalabo/>) までお願いします。

1. 著者紹介

Yamuna Kachru

米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校（University of Illinois at Urbana Champaign）の言語学の名誉教授で、インド、英国、米国で教鞭をとり、アジア、ヨーロッパ、北アメリカで講演を行ってきた。主な研究分野は、ヒンドゥー語や他の南アジアの言語の構造、世界の英語を用いた言語と文化を超えたコミュニケーションなどである。2006年にはインド大統領によりヒンドゥー語言語学への貢献に対して表彰されている。

主な著書としては以下のものが挙げられる。

World Englishes in Asian Contexts (with Cecil Nelson, 2006) アジアにおける世界英語

Handbook of World Englishes (edited with Braj Kachru and Cecil Nelson, 2007)

世界英語ハンドブック

Cultures, Contexts, and World Englishes (co-authored with Larry Smith, 2008)

文化、文脈と世界英語

Language in South Asia (edited with Braj Kachru and S.N. Sridhar, 2008). 南アジアの言語

## 2. 概要

### 2.1 Introduction 導入

#### 前提となる概念

英語の意味と英語そのものを研究するためには、おそらく、B.Kachru(1985)が提案した構図を参照することが有効である。B.Kachru(1985)によれば、英語使用の世界は3つの同心円に分けることができるという。

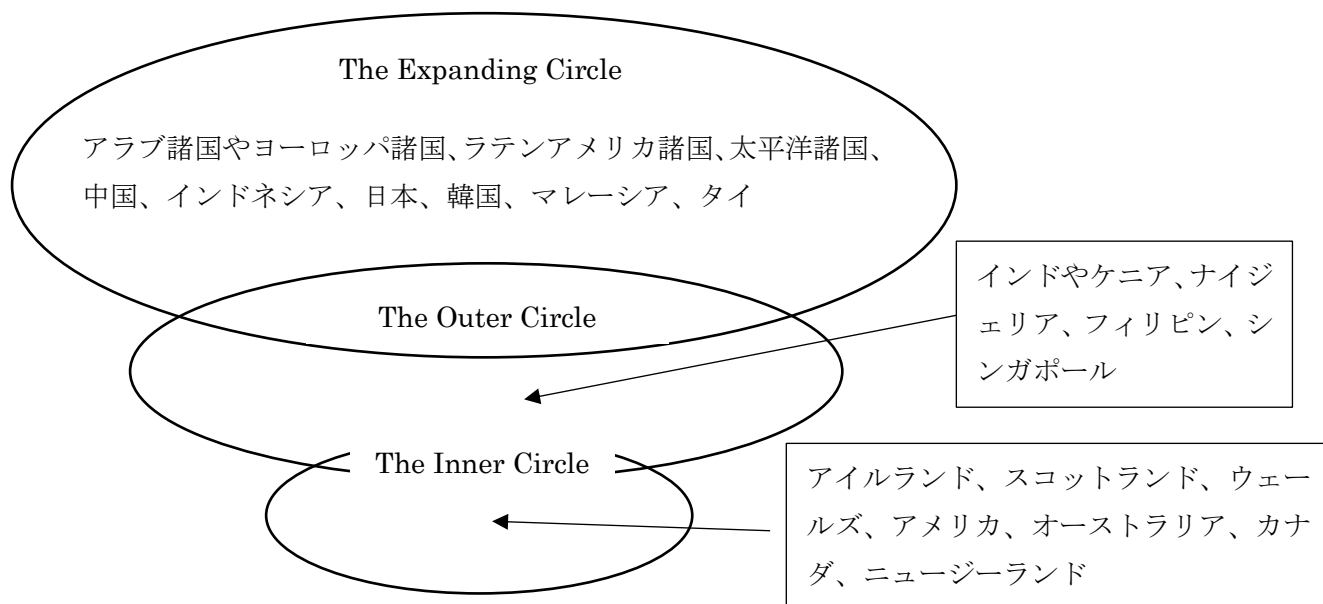


図1 B.Kachru (1985) による World Englishes (WEs) 構図

**Inner Circle** は英語の起源（イングランド）やのちに広がり大多数の人によって最も重要な言語として用いられている地域（アイルランド、スコットランド、ウェールズ、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド）など、英語の伝統的、歴史的、社会言語学的基礎に相当する。

**Outer Circle** はインドやケニア、ナイジェリア、フィリピン、シンガポールなど元植民地やイギリスやアメリカの影響を受けた地域からなる。これらの地域では、英語話者の大規模な移住があったわけではないが、その代わり少数の役人や教育者、宣教師が責任をもって現地の人々に英語を普及させようとしていたのである。今ではその住民の英語の変種は公用語のひとつになっていたり、教育や行政、法など多くの生活領域で用いられていたりするまでの地位となった。**Expanding Circle** は直接的な植民地支配を受けていないが、徐々に西洋の影響を受け、英語が学術やビジネス、商業、高等教育、メディア、科学技術の分野において重要な言語となった国からなる。英語は公的な地位が与えられているわけではないが、広く教授され、国際コミュニケーションの場においても用いられているのである。

## 目的

本章の目的は世界の様々な地域における英語教育の観点から見た WEs の研究の概観を示すことにある。

## 問題意識

- ・英語は「広さ」と「深さ」の両方を併せ持つ
- ・何が「標準」であるのかという議論
- ・英語に対する先入観
- ・WEs 研究と言語研究、言語教育との関連

## 2.2 Emergence of Varieties in Diaspora Diaspora（散布地域）における変種の出現

B.Kachru（1992c）が提案した英語の Diaspora は 2 つのタイプに分けられる。

表 1 B.Kachru（1992c）の Diaspora の 2 つのタイプ

第一 Diaspora		第二 Diaspora
英語話者の移住の結果	過程	世界のあらゆる場で多種多様な言語の集団の間で英語が使用されることにより広がった
オーストラリアや北アメリカ、ニュージーランド	具体的地域	アジア、アフリカ、カリブ海
言語接触による変化 移民によってもたらされた言語	変種の出現	一握りの英語話者によって移動させられた言語

## 2.3 Aims and Focus of Research 研究目的と研究の焦点

### WEs 研究の焦点

出現から文法、社会言語、イデオロギー問題、創造的な文学、そして教育に至るまで、すべての側面に関心が注がれている。世界の英語の普及の歴史、言語形成の研究、さらに加えて、特に第二 Diaspora における英語使用の社会文化的文脈の研究にも関心が寄せられ、また、メディアや広告、商業における英語使用や WEs の表現形式、様式もかなり多くの注目を集めている。

### 変種間における通じやすさ

変種間における通じやすさはいくつかの領域をまたぐまた別のテーマである。通じやすさの問題は原住民の移住による現地化された変種の通じやすさである。Sridhar（1994）によると、なまりや母語からの転移、言語の混在や言語の切り替えなどは安定したマルチリンガルコミュニティにおいて言語的レパートリーを豊富にさせているという。つまり、それは変種が通じやすさの言語的障壁となっているのではなく、むしろ、モノリンガルと同じくらい自然なスタイルと言語切り替えを行っていることを示している。

これらの地域における言語接触や融合は英語だけに影響を与えているわけではなく、現地の言語にも影響を与えている。したがって、WEs の研究者は接触と融合の影響を明らかにするために、英語と現地語の間の

双方向の相互作用に関心を向けている。接触と融合の接点は（英語の）「現地語化」、（現地語の）「英語化」と名付けられた。

全ての Outer Circle の変種は全ての英語話者の中で互に通じ合える標準のまたはなまりのある（現地語化した英語、英語化した現地語）形を持つという論争が論証された。

#### WEs 研究の焦点

Outer and Expanding Circle における英語教育

地域内での変種、国単位での変種

○英語使用のコミュニティ内での変種の機能的な使い分け △変種や言語習得の欠乏に関する理論

Inner Circle の変種と比較した Outer Circle と Expanding Circle の変種の違い

#### 2.4 The relevance of WE as a Field of Research 研究分野としての WEs の妥当性

#### native speaker（母語話者）という考え方

言語学理論に向けた WEs の妥当性と関連性は 1960 年代から多く議論されている。はじめに、言語システムの理想化の代わりとなる変種の構築の手段として議論された。これと関連して「native speaker（母語話者）」という考え方は抜本的な改革を経験すべきである。言語学者、言語教育者は英語の母語話者か非母語話者かという発想ではなく、「WEs の話者」という発想ができるようになるべきである。実際には多くの標準（オーストラリア英語、カナダ英語、ニュージーランド英語、インド英語、ナイジェリア英語、フィリピン英語、シンガポール英語、その他）が存在しているのだから、「女王の英語」もしくは「アメリカの英語」という英語がひとつの標準であるという考えは変わるべきなのだ。それらのいくつかは独自の文法や辞書を持ち、その他は発展途中であるのだ。

#### 英語研究の面白さ

英語研究の面白さは言語の持つ可能性を大きく変えた英語の広がりや英語の能力（使用法？）にある。ヨーロッパ（特にはじめにノルマン征服後のフランス、その後ギリシャやラテンのような古典的な言語）からの借用と適応が英語のもつ可能性を広げたのと同様に、アジアやアフリカの言語そして太平洋の言語からの借用と適応もまた、英語のもつ意味を変えたのである。

Religion ← サンスクリット語の「dharma」アラビア語の「din」

God ← サンスクリット語の「Brahman」アラビア語の「Allah」

サンスクリット語の挨拶「namaste（あなたにお辞儀をする）」→アメリカの一部のアフリカ系アメリカ人の教会で使われている

単に語彙レベルだけでなく、ヒップホップの世界流行のように言語が新たな文脈において広く使われていること（文化交流と 3 つの円での人々が行う政治的、外交的、経済的、商業的交渉における意味の創造の全てのレベルにおいて）と同様に英語がその可能性を広げているという意味生成のレベルのことである。

#### SLA 研究

Outer Circle における英語やインドにおけるヒンディー語、東アフリカにおけるスワヒリ語を含むより広いコミュニケーション（LWC）の多くの言語は基本的にはほとんどマルチリンガルの人々によって使われて

いる。彼らは自身の身近なコミュニティではひとつの言語を話し、多くのコミュニティがある教育や行政、専門などより広い文脈では相互理解可能な言語を用いる。この点で SLA 理論は、多くの話者を擁するが「ideal native speakers (完全な母語話者)」の定義づけがないため、これら LWCs の習得について何か述べる権利はまったくない。ここでひとつの疑問が生じる。我々はどのようにすれば広く広まった現象を無視し普遍的な理論の構築を主張することができるのだろうか。

現時点では、言語学と SLA 理論における普遍性の主張は無意味である。

## 2.5 Lingua Franca and Global Englishes 世界共通語と世界緒英語

### Lingua Franca

EU におけるビジネスのような文脈で、外交交渉や政治問題の交渉を行うときの、他の言語の話者によって話される言語というもの

### Global Englishes

複数形の Global Englishes は WEs と同じように使われる

単数形の Global English はグローバル化の過程の中での言語の使い方を呼称する

## 2.6 Future of WEs WEs の将来

WEs の普及と働きは広がり、それと同時に幅広くコミュニケーションができる他の言語や競争者の使用の領域は現時点では狭まっているようである。

LWCs 変種 (アラビア語、中国語、ヒンディー・ウルドゥー語)

中国語…文化的、政治的、経済的な理由から東アジア、東南アジアで最も有力な言語である

マンダリン学習者の数は 10 年前後で 3000 万に達する Graddol (2006)

世界の中国語学習者は現在 4000 万を越えている

Chinese Language Council International (中国語国際協議会)

2010 年時点で外国語として中国語を学ぶ学習者は約 1 億人になる 教育省

しかし、、、これらの数字は次の 10~20 年では英語学習者の推定数 (2 億人) には届かない

より多くの子どもや大人が英語を勉強しているのだから、中国がアジアや西洋で中国語の教授を早めようとするのは意味がない…

## 2.7 WEs and the Language Classroom WEs と言語教育

言語教育でのどの文脈でも、何を学ぶか、何を教えるかという問題は必ず挙げられる。ELT の場合、ここ最近の議論は英語の目的であるが、Outer Circle と Expanding Circle は一般水準の追求と WEs の発想に影響された標準に関する疑問の再考をし始めている。

英語の標準とは…??

変種はそれぞれの社会文化的文脈における機能を有している。したがって、

**全世界での厳格な言語水準を負わせることは不可能であり、望ましいものでもない。**

ここでひとつの疑問が浮かぶ。

## 変種の互いの通じやすさはどのように存在できるのだろうか。

互いの通じやすさに注意が払われている間は特に特徴のない変種は特権のある位置にあるが、多くの変種の中の一つは身をさらされ、一つはアクセントや語彙、文法、談話ストラテジーにおける違いの適応法を学ぶのである。そして、新しい進歩のメディアを通して英語の変種がますます習得しやすくなる。インターネットやケーブルニュースの資源はすべての英語の変種にさらされる2方向のどちらかひとつの例である。

辞書編集…英語の語彙の言語接触の広大な影響を書く (Encarta World English Dictionary : 東アフリカ、香港、ハワイ、マレーシア・シンガポール、南アフリカ、南アジア、イギリス黒人英語、アフリカ系アメリカ英語 / The Macquarie Dictionary : 南東アジア英語、マレーシア、シンガポール、フィリピン)

ICE (英語の国際コーパス) …3つの円から集められた15の異なる国のコーパスの基礎においてWEsのいくつもの記述研究が生み出されることが予測される。

最後に、英語教師はWEsの文化的意味を教室の関係者に気づかせるためにアフリカやインド、シンガポールその他の変種で書かれた文学作品を見るべきである。

例：韓国のHannam大学、Open Cyber大学

英語の韓国人学習者へのWEsの教授のための資源としてインターネット授業を導入し発展させている。どちらの教師も英語の3つの円全てのウェブサイトから資料を選んでいて、それらの資料に基づいて言語教育を行うためにユニットの割り当てを準備している。

ELT専門の現在の実践における変化をもたらす鍵となる分野の一つはEL教師研修である。現時点でInner Circleにおいては訓練を受ける人に英語の変種の世界を気づかせる要素をもつ教師研修はほとんどない。

例：ポーランド大学…第二言語かTESOLとしての英語のトレーニング (パイロットプロジェクト)

インドの大学…英文学のカリキュラムにおけるWE文学

アメリカのいくつかの大学…民族文学を学べるオプション

→違いに対する自覚は変種に対する偏見や抵抗感、言語の標準と「所有権」についての社会通念など多くの問題を解決する。

## 2.8 Conclusion まとめ

まとめでは、WE研究のコミュニティはInner Circle、Outer Circle、Expanding Circleにおける英語教育のパラダイムシフト、母語話者と他の英語話者というような英語に関する社会通念と社会言語学的現実のギャップをうめるパラダイムシフトを予期している。

最近の研究のWEsの発展と関連する文脈や文化、アイデンティティの複雑な問題の自覚を知ることは励みになる。その自覚は国際言語としての英語の記述を扱った研究に特に社会的、文化的背景での文脈とコミュニケーション能力の間にある関係に基づくコミュニケーション能力の間に重きを置く研究に影響される。

WEs の研究者は以下の引用のように証明した考えに適応するよう励んでいる。

哲学を含んだ言語学の記述は world Englishes が言語学としての我々の研究へ与えるかもしれない影響の歴史をたどるだけではない。話し手が言語間およびコミュニケーションの両面からのコミュニケーション上のリスクを抱く勇気と、これらの試みからの理解を得るには、実用的なニーズがイデオロギーを十分に上回る、より基本的なレベルでの言語使用が包括的に存在する可能性がある。

言語教育者として、私たちは WEs は言語学だけに当てはまるのではなく、言語教師、言語学習者がともに WEs の考え方を欠くことのできない健全性を認めることを望まなければならない。

### 3. 発表後、話し合ったこと

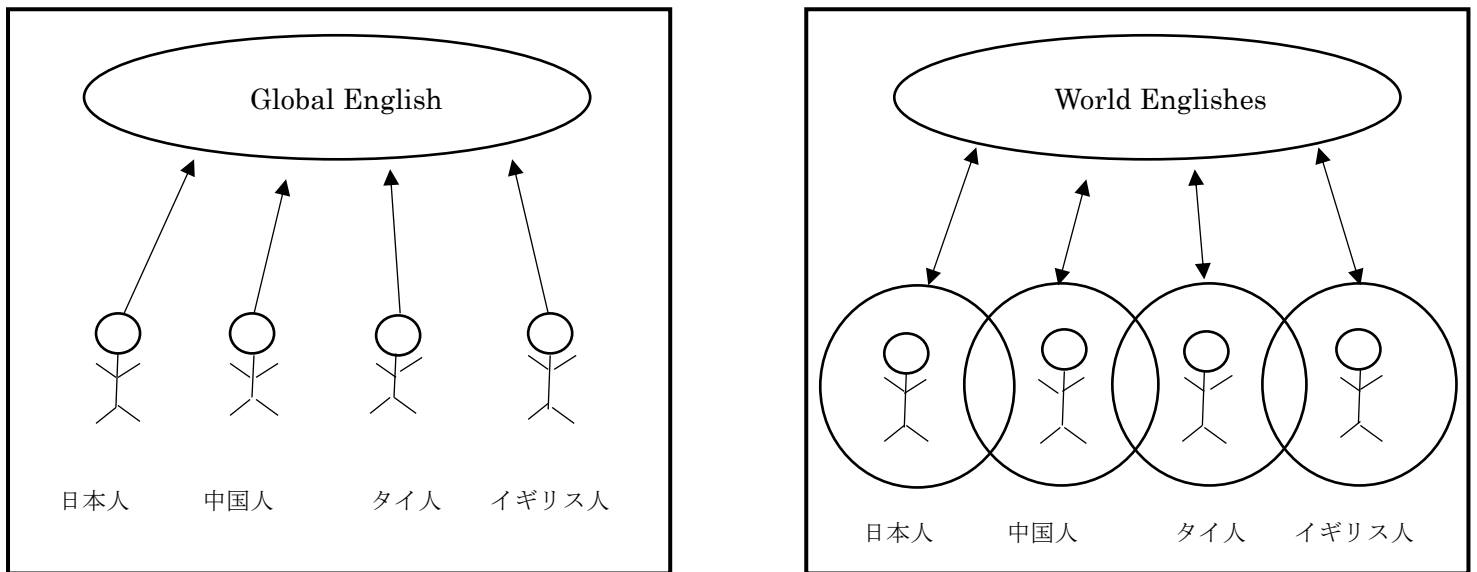


図2 Global English と World Englishes の発想の違い

・ Global English は異なる母語を持つ人々が集まったときの言語的手段で、World Englishes はそれぞれの母語を持つ人々が使う、それぞれの英語のバリエーション。唯一絶対の正しさがあるのではなく、どの変種も等しく価値がある。「みんなの英語」「みんなの日本語」（それぞれを認めるという意味での「みんな」）

・ それぞれの変種が認められる場合、つまり、母語話者・非母語話者の概念がなくなり、変種の話者と捉えた場合、言語を「習得」するとは何を指すのだろうか。今まで、考えられてきた「母語話者」というゴールがなくなったとき、何を指すべきなのか、何を指すのか。

・ ↑のひとつに「洗練された文章、文法」があるのではないか。「表現方法の磨き方」「移民文学」「新たな文学の創造可能性」